

中国の記

その9



大滝 邦彦 著

(Ⅲ) 昔の中国を懐かしみながら、。
(09) 広東省

目次：

(1) 広州へ

(「百越、越族、越人、越、粵」と呼ばれる民族と「日本人」との関りは?)

(2) 広州を歩く

- ①南越王墓博物館(古代の「南越国」を観る)
- ②鎮海楼(広州の近代史を想う)
- ③中山記念堂(中国近代革命の父、「孫文」を想う)

(3) 順徳県

- ①順徳へ(20数年前の順徳は今は昔)
- ②清暉園(20数年前に逗留した由緒ある古園、「清暉園」)
- ③金頭(20数年前の工場は?)
- ④園林賓館(20数年前のレストランは?)
- ⑤順徳県の夢(20数年前の仕事仲間は?)

概要：

20数年ぶりに広東省を訪れた。広州の空港には、古の面影はなかった。南越王墓博物館で古代の「南越国」を、鎮海楼で広州の近代史を、そして、中山記念堂で中国近代革命の父、「孫文」を想う。その後、近代都市に変貌していた順徳の街並みの中に昔の片田舎の面影を探す。

(Ⅲ) 昔の中国を懐かしみながら、。(09) 広東省 (1) 広州へ (「百越、越族、越人、越、粵」と呼ばれる民族と「日本人」)

(1) 広州へ (「百越、越族、越人、越、粵」と呼ばれる民族と日本人との関りは?)

昆明桜花酒店をチェックアウトする。朝食付き2人で700元(約1万円)と日本に比べると安い。ホテル前の大通りでタクシーを拾い、昆明巫家壩国際空港へ向かった。この空港は、市街地に近く拡張が困難なので昆明市内から東方約25kmのところ、新空港、昆明長水国際空港が建設中で、来月(2011年6月)末に開港される予定と言う。

国内線の広州行き登場口の待合室へと進むと、すでに乗客十数人が椅子に座って搭乗を待っていた。正面の売店では、女性スタッフがバッグ、衣服、置物そしてタバコなどを売っており、その傍らには、男性が待合室の壁に沿って並べた長机の上にパック詰めされた或は量り売り用に箱の中に盛られた赤い木の実や黄色い果物を売っていた。

出発までにしばしの時間があつたので、その黄色いマンゴーを買って食べたみたが、完熟しており、柔らかく甘味が濃かった。

広東省の広州までは、2時間15分の飛行となる。航空運賃は、1260元(約19000円)で、東京～沖縄の2時間30分の正規航空券の値段、4万より安い、格安キップの約2万とほぼ同等である。中国の鉄道、バスの運賃は、日本に比べると非常に安い、航空運賃には大差はないようだ。多分、飛行機を利用する人は、”有钱人 yǒu qián rén (お金持ち)”だと中国政府が考えて、経済的に適正な価格を設定しているのだろう。

広東省へは、20数年振りである。いよいよ搭乗となると、”好久没回家”かとの懐かしい思いが込み上げて来た。広東省は、中国大陸の東南部に位置し、北に長江の中流南辺の湖南省、江西省及び長江の下流南辺の浙江省の南に位置する福建省と接し、西に広西チワン族自治区と接する。なお、東南部は南シナ海で海岸線が曲折して、港と島が多く、南の先端部は、かつて広東省の一部であった海南島がある。また、かつての英国の植民地、香港とポルトガルの植民地、澳門(マカオ)と隣接している。

地形は、北に高く南に低い地勢で、北部には東西に湖南省・江西省と境界をなす南嶺山脈が走る。南嶺山地に属する標高約1000～1500mの粵北山地や標高1000m以下の低山丘陵の粵西山地台地や約標高1000mの九連山・羅浮山などがある粵東山地丘陵が約80%で、南部沿海部の珠江デルタ(約0.86万km²)や東部沿海部の韓江デルタ(0.12万km²)の平原が約20%である。

平原部、特に珠江デルタには、惠州西湖、潼湖などの多くの人工湖、池が分布しており、東南部の南シナ海沿岸部は、曲折した海岸線で港や島が多い。また、河川が多く、最大の川の粵江は、西江、北江、東江の3つの支流を有するが、本流の西江の上流の支流、漓江には、”山水甲天下”の桂林山水がある。

西江の全長は2216kmと長く、流域面積が45万km²に達する。広州から磨刀門海入口までの96km区間は珠江と呼ばれ、その流量は黄河の6倍に及ぶ。なお、北江は468kmで、東江は523kmである。第2の川は、粵東韓江で汀江を源とし、汕頭付近で海に入り、本流が325km、支流の鑑江は211kmで、漠陽江は160kmである。

この広東省及び広西チワン族自治区と江西省及び湖南省との境を北東から南西に「南嶺山脈」が走っており、北の長江と南の珠江との分水嶺となっている。この「南嶺山脈」の南の地域は、「嶺南」と呼ばれる。

古来、この「嶺南」及び「嶺南」の北に位置する現在の福建省や長江の下流域の現在の浙江省、そして、「嶺南」の南に位置する海南省や越南(ベトナム)に至る広大な地域には、「百越または越族、越人、越、粵」と呼ばれる民族が住んでいた。

その民族の起源は、現在の浙江省の東海岸と言われるが、川を”江 jiāng”と呼ぶ「稲作民族」で。この「稲作民族」の言語は、”古越語”で、川を”河 hé”と呼ぶ北方の「畑作民族」の”上古漢語”とは、元来異なる言語であった。

周王朝（紀元前1046年頃～前770年）の時代及び春秋時代（紀元前770年～前403年）に入って、「呉国」（紀元前585年頃～前473年）が現在の江蘇省の蘇州周辺に、そして、「越国」（紀元前600年頃～前334年）が現在の浙江省の周辺（都は現在の紹興市の「会稽」）に建国された。

「会稽」と言えば、先に洛陽へと、所謂、「中原」を走る列車の中で思い巡らした幻の王朝、「夏王朝」の伝説のことが思い起こされる。

『史記』が記すところによると、その昔、大洪水があったが、「堯帝」の時、「禹」の父が治水に当たったが失敗したので「舜帝」の時、父の後を継いで治水に成功した「禹」がその功績によって夏国の王に推挙された。

「舜乃使禹疏三江五湖，～平通沟陆，流注东海。shùn nǎi shǐ yǔ shū sān jiāng wǔ hú , ～ píng tōng gōu lù , liú zhù dōnghǎi.」と「淮南子・本經訓：前漢の武帝の時、皇族の淮南王劉安（紀元前179年～紀元前122年）が学者に編纂させた思想書」にある。「禹」は、「舜皇帝」に命じられて、「三江五湖（三つの川と五つの湖）」の「疏（水の通りを良くし）」、陸に溝を平たく通して、「東海（現在の浙江省の東の黄海～東支那海）」へ流したのである。"三「江」"とあるので「川（かわ）」を、「河（hé）」でなく「江（jiāng）」と称する南方系の『江（jiāng）民族』が、この「川（かわ）」の辺りには居たことになる。

「禹」は、「塗山」の女嬀と結婚し王子「啓」をもうけたが、「塗山」は、河南省の「禹州市」から淮河を下った現在の安徽省蚌埠市にあり、「塗氏」の発祥は安徽省の淮河の南岸に流れる「長江下流」の支流である「涂水流域」という。

安徽省の東隣の江蘇省は、紀元前5400年～前4000年頃の『青蓮崗文化』及びその系統の紀元前5000年～前2000年頃の『龍虬庄文化』があったところである。

そして、南隣の浙江省には「会稽山」があるが、ここは「禹」が亡くなった地であり、亡くなる際に諸侯が一堂に会しその業績を計ったことから「会稽（会計に通じる）」と称されるようになったと「史記」は言う。

なお、「会稽山」には、現在も「禹」を祭った禹王廟があり、後に「夏人」の末裔だと自称して、福建省、広東省、広西省から越南（ベトナム）に掛けて活動した「越人」はここを聖地としたが、ここ「会稽山」の山麓には、紀元前5000年頃～前4500年頃の浙江省余姚市の「河姆渡遺跡」、紀元前3600年頃～前2700年頃の『馬家濱文化』、それを継承した紀元前3500年～前2000年頃の『良渚文化』があった『稲作文明』の地である。』

「史記」は、更に記している。夏王朝の第6代帝、少康の庶子である無余が「会稽」に封じられ越国の始祖になった。春秋時代（紀元前770年～前403年）には、「会稽」は「越国」の都として発展したが、越国王、勾踐は隣国の呉国王、夫差に敗れて「会稽山」に逃げ込み、屈辱的な条件での和睦で助命されたが、後に勾踐は「呉国」を滅ぼした。この故事によって、敗戦の堪え難い屈辱を意味する「会稽の恥」の成語が生まれ、堪え難い屈辱の恨みを晴らすことを「会稽の恥を雪ぐ」と言う。

「呉国」は、紀元前473年に「越国」により、滅ぼされたが、「越国」も戦国時代（紀元前403年～前221年）の紀元前306年に「楚国」によって、滅ぼされた。

なお、「楚国」の民族については、所謂、漢民族の母体となった黄河文明の民族が南下して来たとの北来民族説と、長江文明の土着民族、ミャオ族であるとの南方土着族説があるが、有力な証拠はなく現在未だ定かになっていない。

「百越人」は、文化面での稲作、断髪、鯨面（入墨）など、古代の倭人と類似点があり、長江下流域から日本の縄文後期から弥生早期にかけて水耕稲作を九州に持ちこんだとの説がある。

「魏志倭人伝」を著した陳寿が種本とした「魏略」は、陳寿とほぼ同時代の魚豢(huān)の著した書であるが、散逸して現存していない。しかし、その逸文が唐の時代に張楚金によって著された書、「翰苑」巻30に残っている。

『魏書曰 女王南 又有狗奴国 女男為王 其官曰 拘右智卑狗 不属女王也 自帶方至女國万二千余里 其俗男子皆黥而文 聞其旧語自謂太伯之後 昔夏后小康之子 封於会稽 断髮文身 以避蛟龍之害 今倭人亦文身 以厭水害也 』

ここに、「聞其旧語自謂太伯之後 wén qí jiù yǔ zì wèi tài bó zhīhòu（その旧い話を聞くと、自ら太伯の裔と言っている。）昔夏后小康之子 封於会稽 xī xià hòuxiǎokāng zhī zǐ fēng yú huì jī断髮文身 以避蛟

龍之害 duàn fā wénshēn yǐ bì jiāolóng zhī hài (昔、夏后少康の子は会稽に封じられ、断髪文身して、蛟龍の害を避けた。) 今倭人亦文身 以厌水害也 jīn wō rén yì wénshēn yǐ yàn shuǐ hài yě (今、倭人もまた文身(刺青)して水での災害を祓っている。)」とある。

紀元前239年に倭国の女王、卑弥呼が魏から親魏倭王の金印を受けたが、その倭国の言い伝えで、その出目を「太伯」の末裔だと言っており、また、古の夏王朝の第6代帝、少康が封じられた「会稽」では、断髪文身(刺青)して、蛟龍の害を避けたが、今、倭人は文身して、水での災害を祓っていると記している。

なお、「太伯」とは、春秋時代の呉(紀元前585年頃～前473年)の祖である。

先に、九寨溝観光のとき、崎谷満の「DNAでたどる日本人10万年の旅」に挙げられているデータからY染色体のハプログループ(A~T)の日本人、朝鮮の人、中国の人、満州の人そしてチベットの人に於ける分布(%)のベスト3を纏めてみたが、日本人(アイヌ・沖縄の人を除く)と中国の華南の人とを改めて比較した。

Y染色体のハプログループ	O系統	D系統	C系統
日本人(アイヌ・沖縄の人を除く)	O(54%内O2b:26%,O3:19%)	D(33%内D2:33%)	C(9%)
中国の華南の人	O(78%内O3:33%,O2a:30%)	D(0%)	C(5%)

この結果を見ると、日本人の26%のO2bの人は、中国華南の人の30%のO2aの人とは、Y染色体の親戚関係にあると考えられる。

飛行は順調で飛行機が降下態勢に入る。

「广州快到了! guǎngzhōu kuài dào le !(もすぐ、広州に着きます!)」

この機内のアナウンスは、懐かしい。窓の下を見ながら、20数年前の香港から広州へのフライトを思い起こした。

『窓の下を覗くと、着陸する広州の街は暗く、空港に灯る灯はまばらにあるだけであった。薄暗い照明の中で入国手続きを受けて、荷物を受け取って恐々と出口へ進む。そこに、出迎えの中国の男性が掲げる、漢字で書かれた自分のネームプレートを見つけてほっとした。その男性の車でホテルまで走った広州は真っ暗な街であった。』

やがて到着した空港は、新しい欧州式の空港であった。現代的デザインで、天井が高く、眩しいくらい明るい。この”広州白雲空港”は、中国国内では、北京首都国際空港、上海浦東国際空港に並ぶ、3大空港の1つで、2004年に開港した。中国南方航空、中国国際航空と深土川航空が同空港をハブとしている。また、2009年からは航空貨物大手のフェデラルエクスプレスがアジアのハブ機能をフィリピンのスービック・ベイ国際空港から移転させたと言う。総面積は、1500万㎡と成田空港の約1.6倍ある。

予約してある広州白雲国際空港ホテル、”広州白雲機場金白尔曼大酒店”は、空港との複合施設の5つ星ホテルで、プールやサウナ・ジムにテニスコート、スパ・会議室等充実して施設を有している豪華ホテルである。バッグをフロントに預けて、ホテル前で記念写真を撮り、今日の参観先、「南越国博物館」へと向かった。

(Ⅲ) 昔の中国を懐かしみながら、。(09) 広東省 (2) 広州を歩く ①南越王墓博物館 (古代の「南越国」を観る) ②鎮海楼 (広州の近代史を想う) ③中山記念堂 (中国近代革命の父、「孫文」を想う)

(2) 広州を歩く①南越王墓博物館 (古代の「南越国」を観る)

今日の最初の目的地、「南越王墓博物館」の最寄の駅は、広州地下鉄2号線「越秀公園駅」とガイドブックにある。ここ、広州白雲国際空港は広州市内への地下鉄3号線の終着駅なので、嘉禾望嵐と言う駅で3号線から2号線へ乗り換える必要がある。

地下鉄キップ売り場へ行くと、自動販売機が並んでいた。北京でのダオヨウさんの息子さんの話を思い出し、安全を期して「人口售票処」でキップを買うことにした。

「我要去越秀公园的一张票。wǒ yào qù yuè xiù gōngyuán de yī zhāng piào . (越秀公園までください。)」

と言って、服務員に紙幣を出したところ両替されたコインのみが戻って来た。

周囲を確認すると、ここでは、乗客は皆んな自動販売機でキップを購入している。そう言えば、日本でもそうである。皆さんが買っている方法を見習って、何とか「越秀公園駅」まで行けるキップを手することが出来た。

改札口を通り、やって来たホームには、ホームドアがあった。最近は、東京の地下鉄にも散見される安全ドアであるが、ここ、広州では、すでに、最新式の安全対策が取られていて感心する。

やって来た電車に乗り込み、吊り輪を握って立っていると、目の前の若いカップルが我々に席を譲ってくれた。北京でもそうだったが、年寄りに気を使う若者は多いようだ。

電車の中の風景で、スマートフォンを片手にしているところは同じだが、北京と違う所が1つあった。席を譲ってくれたカップルも含め、乗客が男女とも皆小柄である。先に訪れた洛陽や西安の人達と比べても背丈がずっと小さい。「百越人」のDNAを引き継いでいる人が多い所以なのだろう。



その「百越人」の地、「嶺南」は、紀元前221年に中国を統一した秦の始皇帝によって、紀元前214年に征服され、南海郡 (現在の広東省)、桂林郡 (現在の広西チワン族自治区)、象郡 (現在の広西チワン族自治区の西部及び現在の越南 (ベトナム) の北部) の3つの郡が設立された。その南海郡の番禺が、ここ、広州の始まりである。

秦王朝が紀元前206年に滅びると、現在の広東省、広西、越南 (ベトナム) にかけての領域に「南越国」が、そして、現在の福建省の閩江周辺に「閩越国」が建国された。

「南越国」は、南海郡の将軍であった趙佗によって、紀元前203年に建国され、その後、紀元前111年まで93年間に渡って、5代の王によって統治された王国で、「南粵」、「趙朝」とも呼ばれる。

その「南越国」の第2代王、趙昧（文帝）の王墓が、ここ、広州の象崗山から1983年に発掘された。この王墓の遺構をそのまま保存した博物館が1989年に造られ、出土品及び南越国に関する資料が展示されているのが、これから訪れる「南越王墓博物館」である。

“越秀公園駅”を出て、右へ坂道を登ったところに、レンガ色の「南越王墓博物館」があった。12元（約180円）のチケットを購入して、博物館に入る。

ここ、象崗山の地下20mの所で発見された王の墓室は、彩色壁画を有する石室墓であった。墓室の建築面積は約100㎡で、前方部分の前室を中軸に、両側に東耳室、西耳室があり、後方部分は主室を中心に、両側に東側室、西側室、そして後部に貯蔵室があり、あわせて七つの室がある。

盗掘されてなく、墓室から主葬者は、1191枚の玉片を赤い絹糸で繋ぎ合わせた「絲縷玉衣」を身に纏い、千点以上の出土品とともに発掘された。内部には15人の副葬者もあったと言う。

“文帝行璽”の金印、“趙昧”との玉印など9つの印も出土したことから、墓の主は、「史記」や「漢書」に登場する「南越国」の初代王、趙佗の孫、趙昧（在位：紀元前137年－前122年）と確定された。



青玉角杯、角形玉製杯、竜鳳図案の透かし彫り玉製佩、銅製捺染用型、ガラス製の板形飾りなど歴史的、科学的、芸術的に価値ある約1万点の副葬品が発掘された。

青銅器は、漢文化と南方の楚文化、そして、越文化の特色を併せ持つ貴重な出土品と言うが、銅鏡は日本の古墳から出土の鏡と似ている。また、刀もみごとである。



「南越王」が統治した「嶺南」の政治、経済、文化の発展様相を反映したこの王墓、そして、多くの出土品は、その貴重な価値が認められて、ここ、「南越王墓博物館」は、1996年に「国家重点文物保护单位」(国家重点文化財)に指定された。

ここ、「南越国」の後の「嶺南」の民の行く末を案じながら「南越王墓博物館」を後にした。

(2) 広州を歩く②鎮海樓（広州の近代史を想う）

「南越王墓博物館」を出て、越秀公園前駅へ戻った。駅前の交差点を渡ったところに越秀公園への正門がある。越秀

公園は、広州市の中央にある越秀を中心とする総面積約85㎡の文化公園で、緑豊かな景観と豊富な嶺南文化の旧跡がある。これから訪れる「広州博物館」は、元、「鎮海樓」と呼ばれた5層の“大樓”である。



「鎮海樓」は、小高い丘の上に堂々と天守閣のように聳え立っていた。10元（約150円）を支払って、入口の門をくぐると、「広州博物館」らしく、広州の文明・歴史についての解説文が掲示されていた。

『（1）文明の夜明け：広州は珠江の東西北の支流が合流する所で、海に面し、背後には山がある。亜熱帯地域で、1年中春のように温暖で湿潤な天候である。ここ、「嶺南」には、先史時代の紀元前4～前5千年に、既に新石器文明を開始していたとの考古学の発見がなされつつある。

（2）南越の首都：紀元前214年、「秦の始皇帝」は「嶺南」を征服するために軍隊を派遣し、南海、桂林、象3つの郡を設立したが、この南海の番禺が現在の広州である。古代の番禺は嶺南の第1の都市であり、秦の末、趙佗は桂林と象郡を合併して「南越王国」を設立した。南越王国の王宮は現在の広州市の中心にあった。

（3）嶺南の首都：西（前）漢の武帝（紀元前141年～前87年）の時代、番禺の港から出発した船は、東南アジアと南アジアと、東（後）漢（紀元25～220年）時代には、ペルシャ湾の諸国と交易した。王墓からは、海上の乗り物と共に、香炉、ガラス器、サイの角、象牙や真珠の装飾品を含む、多くの海外の物品が出土している。

（4）広州の名称：「三国時代」の紀元226年に呉の孫権は、嶺南地方を交州と広州に分割し、合浦以南を交州、以北を広州としたが、これが“広州”の名の始まりである。

（5）南の宝の穀倉：造船技術と海外交易は発展し、唐の時代（紀元618年～906年）を通じて、広州は海のシルクロードの起点となり、唐王朝の財政収入源となったが、明・清の時代まで「天子南庫（天子の南の宝の穀倉）」と呼ばれた所以である。

（6）南漢の首都：唐王朝が倒れると、紀元917年に劉龔が南漢の王を名乗り、「五代十国時代」（紀元907年～960年）の紀元909年からここ、広州を統治したが、紀元971年に「宋王朝」に滅ぼされた。

（7）三城統合：南漢時代に宮殿の城（街）、王族の城（街）と商業の城（街）の3つの街を1つの城壁で囲う計画が立てられて、宋の時代の紀元1068年に東城が、5年後に、商業地区と外国商人の居住区に西城が建設され、明の時代の紀元1380年に、永嘉侯朱亮祖によって広州の古い街が1つに統合された。このように広州市街は珠江沿岸まで拡張されて、現在の広州市の核となった。

（8）中国王朝の公行設置：明の時代の中期以降、広州は世界交易で活発になった。外国船と中国商人の間の交易によって繁栄する中で、清朝は広州に13の公行を設置した。行商は交易を独占する権限を与えられた。こうして広州は、清王朝の南部の窓であるだけでなく、国際交易の中心として確立され、公行は広州の発展と東西の文化交流に重要な役割を担った。

（9）西洋文化の最初の受容：明・清の時代以来、外国交易が増えるに従い、西洋文明が中国に導入され、西洋の科学、技術と教育の導入は広州を東西文化の坩堝となった。

近代的な工業と商業の出現は、広州に色々な分野に大きな変化をもたらした。日常生活、飲食、服飾、葬式や結婚、

そして宗教などの典型的な西洋風文化がもたらされた。このようにして、広州は外国文化を受け入れた最初の都市になった。』

明王朝の紀元1380年に、永嘉侯朱亮祖が広州の城壁を越秀山まで拡張したときに、山頂に壮観な眺めの5層の楼を建造したのが、この「鎮海楼」である。当時は、ここから珠海が望めたので「望海楼」とも、五層だったので「五層楼」とも呼ばれた。

1928年に木造だった「鎮海楼」は、高さ25m、幅31m、深さは16mの長方形の鉄筋コンクリートの楼に造り直され、1929年に広州市立博物館とされた。下2層の壁は赤砂岩を積み重ねたもので、3層以上はレンガ壁を有し、庇が二重となっている。緑の琉璃瓦に覆われ、棟には大亀や魚、花の文様などが彩色漆で描かれている。1950年には、「広州博物館」と改名され、広州の2千年来の発展の文物資料が展示されている。

最上階の5階にあるベランダから広州市街を一望する。実は、ここから広州市街を望むのは初めてではない。20数年前、初めて広州を訪れたときにも、ここ、「鎮海楼」に登って、この欄干越しに広州市街を見下ろしたことがある。

灰色の屋根の家が並び高層ビルと言えば、ホテルなどで数少なかった。当時、道路は広がったが、交差点に交通信号、「紅緑灯」もないところが多く、あったとしても小さい「紅緑灯」のが道路の脇に記し程度に置かれていた。交通手段のほとんどが自転車で、車はほんのまばらにしか走っていなかった。

しかし、今見下ろす景色は一変している。近代の高層建築、「大樓」郡が所狭しと競い合っており、道路には車が連なりあって、ひしめいている。東南方向に高く「廣州塔」が聳えている。塔本体の高さ、454m、尖塔頂上までの高さ、600mの展望台や観光施設を有する電波塔で、来年（2012年）竣工する東京スカイツリーの634mよりほんの少し低いが、美しい鼓状の双曲面構造、傾斜楕円形をしている。建築設計コンペで選ばれた英国のアラップ社設計で建設され、2009年に竣工し、2010年に一般公開が始まったと言う。

動物園はこの東の方角の先にあるはずだと見渡すが、見通せない。ここ、広州も北京や西安に比べるとまだましであるが、昔澄み切っていた空は透明感を失っていた。日本の動物園とは異なり、広い自然の中で土まみれとなって自由に遊んでいた真っ黒なハンダ達は、今も元気だろうか？

真下の越秀公園の南、越秀山の麓に、これから訪れる「中山記念堂」はある。昔今の広州の姿が二重写しのようなになった脳裏の映像が失せないようにゆっくりと「鎮海楼」の階段を降りる。

この「鎮海楼」の西側には、明王朝時代から清王朝時代の「アヘン戦争」までの広州で鑄造された大砲が陳列されていた。

繁栄を続けていたここ、広州の歴史は、この「アヘン戦争」によって一変する。

（2）広州を歩く③中山記念堂（中国近代革命の父、「孫文」を想う）

広州、否、中国の清王朝の歴史は、1840年に勃発した「アヘン戦争」で一変する。

英国は、清王朝との貿易で紅茶や絹織物を輸入して、綿布を輸出していたが、大幅な輸入超過に陥っていたので、植民

地のインドで栽培させた”アヘン”を清国へ密輸すると言う、正に”マフィア”並の打開策を考え出した。

某国の自称知識人達が「紳士の国」と敬った英国が打ち出した”アヘン密輸”政策によって、輸入超過となった清国から大量の銀が流出した。清国は、この事態を憂慮して、”アヘン密輸”の取り締まりの為に、林測徐を広州へ派遣した。林測徐は、英国商社が所有していたアヘン約2万箱を没収、虎門海岸で廃棄した。これをきっかけとして、英国は1840年、広州に艦隊攻撃を仕掛けた。これが「アヘン戦争」である。

英国軍は1841年5月に、先に訪れた越秀山の「鎮海樓」を占領して司令部を置いた。広州市北郊の三元里村の農民で組織された平英団が抵抗を続けたが、清王朝は、これを解除させて、英国と妥協を図った。

しかし、英国海軍は北上して厦門(アモイ)、寧波、上海、鎮江を占領し南京に迫り、1842年の南京条約、そして、1843年の虎門寨追加条約により、香港の割譲、広州、厦門、福州、寧波、上海の五港開港、そして、清国の関税自主権を奪った。

この「アヘン戦争」の後、1856年の英国・仏国連合との「アロー戦争」、1894年～95年の日本との「日清戦争」に敗れると、清国はロシア、独逸、仏国、英国からそれぞれ旅順・大連、膠州湾、広州湾、威海衛・九龍半島(新界)の租借を強いられた。

この結果、貿易の中心が広州から上海へと移り、失業者の街と変わり果てた、ここ、広州は”中国近代革命”の舞台となって行く運命を担うこととなった。

1866年、広州の南、広東省の現在の中山市で貧しい農家の次男として、「孫文」は誕生した。14歳となった「孫文」は、ハワイで財をなした兄、孫眉の下に赴き、欧米文化と出会う。18歳で帰国して、香港の西医書院に通うが、その在学中(1887年～1892年)に革命を志して、反清運動に加わった。

1894年に孫眉の支持で、ハワイで興中会を組織し、1895年に広東省広州で最初の挙兵、「広州起義」を起こすが失敗に終わり、日本へ亡命する。1900年にも、広東省惠州で第2回目の挙兵、「惠州起義」を起こすが再び失敗に終わり、亡命国の日本へ戻った。その後、「孫文」は1905年に東京で、興中会・華興会・光復会の3つの革命団体を統合して、中国革命同盟会を組織し、三民主義(民族主義・民権主義・民生主義)を唱えて中国の革命を指導した。

1911年に「辛亥革命」が勃発する。”東北満州の女真族(満族)”の征服王朝が紀元1644年から統治した「清王朝」の支配に対して、スローガン、「驅除鞑虏,恢复中华,建立民国,平均地权 qūchú dá lǔ, huīfù zhōnghuá, jiànli mínguó, píngjūn dìquán (北方民族を追い払い、中華を回復して、民主国家を樹立し、地権を平等にしよう!)」を掲げた革命運動である。

日本から中国へ帰国した「孫文」は、1912年1月1日に”南京”で共和国、「中華民国(臨時政府)」を樹立し、その臨時大総統に就任する。しかし、北京には、まだ「清王朝」が存続しており、「孫文」は、宣統帝の退位等の条件で臨時大総統職を袁世凱に譲り、この南北分裂状態の統一を図った。その結果、紀元1912年2月12日に「清王朝」の皇帝、宣統帝(愛新覺羅溥儀)が退位し、「中華民国」が中国を代表することになった。

その後、袁世凱大総統は、統治の拠点を自らの軍事基盤である北京において専制体制を強化し、更には、自らが皇帝となるべく画策するも、反目を買って権威を失墜し病死した。袁世凱の死後、「中華民国」は、軍閥が群雄割拠する内

乱状態となり、英国・仏国・独国・ポルトガル・ロシア・米国・日本などによる半植民地化が進行する。

このような中、「孫文」は、紀元1919年に「国民党」を創建し、1921年に革命政府を、ここ、広州で樹立したのである。これが、「孫文」が「中国革命の父」と言われる所以である。

「中山記念堂」の前庭の「孫文」の銅像が見えて来た。1998年に造られた高さ5mのステッキを持つ立っている。

「中山」とは、「孫文」の号である。「孫文」が広東省の中山出身だから「中山」号した訳ではない。「孫文」は、1895年から1911年に日本に亡命していたときに、住んでいた東京の日比谷公園界隈の「中山」と言う邸宅の表札が気に入って、「孫中山」、「孫逸仙」或は「中山樵（きこり）」を名乗っていた。

広東省「中山」の古称は、1152年に香山県が設置されて以来「香山」が使用されていたが、1925年に「辛亥革命」の指導者であり、「中華民国」の初代総統であった「孫文」を顕彰し、その号から「中山県」と改称され、現在では「中山市」となっているのである。

「中山記念堂」は、1931年に「辛亥革命」の指導者、「孫文」を記念して、革命軍の司令部総統府が置かれていた場所に広州市民と海外華僑の献金によって建てられた。

建築家、呂彦直の設計による紺色の瑠璃瓦が美しい八角形の屋根を持つ独特な宮殿様式の建物は、高さは52m、正門の外側に縁起が良いとされる8本の柱あり、スパンが71mで5千人を収容できる内部には、柱は使用されていない。

天井は傘が広がったような形をしており、自然の光が取り入れられている。中国の伝統的建築技術と西洋の科学技術とを結合した、「中洋折衷」の建築物である。舞台の上に、孫文の遺言と像の刻まれている石碑がある。

『余致力国民革命凡四十年，其目的在求中国之自由平等。积四十年之经验，深知欲达到此目的，必须唤起民众及联合世界上以平等待我之民族，共同奋斗。yú zhì lì guó mín gé mì ng fán sì shí nián, qí mù dì zài qiú zhōngguó zhī zì yóu píngděng. jī sì shí nián zhī jīngyàn, shēnzhī yù dá dào cǐ mù dì, bì xū huànqǐ mǐnzhòng jí liánhé shìjiè shàng yǐ píng děngdài wǒ zhī mǐn zú, gòngtóng fèndòu. (私の力を中国革命に40年余費やした。目的は中国の自由平等を求めることである。40年余積んだ経験から判ったことは、この目的を達成するには、民衆を喚起し、我が民族を平等に遇する世界中の諸民族と連合し、共同しての奮闘が必須である。)

～云々～ 革命尚未成功，同志仍需努力，一万年太久，只争朝夕。gé mì ng shàngwèi chénggōng , tóngzhì réng xū nǚ lì, yī wànnián tài jiǔ, zhǐzhēngzhāoxī. (革命は、未だ成功していない。同志は努力しなければならない。1万年はあまりに長い、一刻を争うのだ。) ～云々～ 』

そして、最後には、自分の著した「建国方略」、「建国大綱」、「三民主義」及び「第一次全国代表大会宣言」を勧めている。

「孫文」は、1925年に死去する。「孫文」を後継した「蒋介石」は、1927年に「南京」を首都とする「中華国民」を樹立して、北伐による中国の統一を図った。翌年の1928年には、「国民党」軍が北京に入城して、北伐を完了した。

そこに、ソ連邦の支援の下、1931年に江西省瑞金に「中華ソビエト共和国臨時政府」を樹立した「毛沢東」率いる「中国共産党」が、1936年に起きた張学良・楊虎城らによる「蒋介石監禁事件（西安事件）」をきっかけに、「蒋介石」率いる「国民党」の「中華国民」政府に対して、抗日の「合作（提携）」を取り付け、抗日戦争、即ち、日中戦争（1937年～1945年）に参戦した。

そして、「毛沢東」率いる「中国共産党」の「人民解放軍」は、1945年の第2次世界大戦の終戦直後には、ソ連邦からの軍事援助を受けて、抗日戦争を共に戦った「蒋介石」率いる「国民党」の「中華国民」政府への攻勢を開始し、1949年4月には首都、”南京”を占領し、台湾島へ駆逐した。

こうして、「毛沢東」は、1949年に「中国共産党」の中央人民政府主席及び国家元首に就任し、同年10月1日に天安門の楼閣の上から「中華人民共和国」の建国を”北京”で宣言したのである。その楼閣から「毛沢東」は、肖像画となって現在も、先に訪れた「天安門広場」を見下ろしている。

「毛沢東」の基本思想は、マルクス共産主義である。元来、共産主義は民主主義と相反する訳ではない。しかし、独裁者そのものであった「毛沢東」は、中国を暗黒時代へと導いて行く。

1958年の経済政策、「大躍進」の失敗により、農村は荒廃し推計2千万人から5千万人もの餓死者を出す。また、1966年からの「文化大革命」では、事業家、資本家や学者、医師、弁護士、教師などの知識人などを強制労働で粛清した。「文革」は、文化遺産の破壊や経済活動の長期停滞だけでなく、多くの被害者（1978年の中国共産党第11期中央委員会によると死者40万人、被害者1億人、海外の研究者の調査では、死者は、6500万～8000万人）を出した。

「毛沢東」が1976年に亡くなると、国務院総理の華国鋒は、江青らの「四人組」を逮捕し、1977年の第11回党大会に於いて、共産党中央委員会主席に就任し、11年間に渡った「文化大革命」の終結を宣言した。この華国鋒を支持して、「鄧小平」が復活を果す。1978年12月、中国共産党第11期中央委員会第3会全体会議は、中華人民共和国の最高指導者となった「鄧小平」が唱える「改革・開放政策」を採択した。この経済体制は、経済特区を設け、外資の導入を一部地域に限り許可・促進する社会主義市場経済と呼ばれる。

「鄧小平」は、民主化の世論も醸成し、その世論を利用して、華国鋒の教条主義的毛沢東崇拜路線を批判し、1980年に片腕の趙紫陽を国務院総理に就任させた。1981年には、華国鋒を党中央委員会主席兼中央軍事委員会主席から失脚させ、腹心の胡耀邦を党中央委員会主席の後任とし、自らは党中央軍事委員会主席に就任して、中国共産党の最高指導者となった。当初、民主化路線を擁護していた「鄧小平」は、この1981年にポーランドでワレサ率いる独立自主管理労働組合「連帯」が非合法化され、その合法化を要求して始まった民主化要求が拡大する動きに危機を覚え、1987年には、政治体制改革推進派だった腹心の胡耀邦を失脚させて独裁政治に走った。

このように中国の世の中が、まだ混沌とした状況であった、今から20数年前のことである。中国広東省から香港の華僑を介して、日本のS商社へ持ち込まれた「有機硝子製造」の技術導入の話が舞い込んで来た。その「有機硝子製造」の技術輸出先である広東省順徳県、否、現在は、広東省仏山市順徳区を明日訪れる。

なお、中国の行政区分は、基本的には省級、地級、県級、郷級と言う4層の行政区のピラミッド構造から成り、郷級の下には村や社区が設けられている。中国の”県”は、日本の都道府県の”県”とは全く異なる。

(Ⅲ) 昔の中国を懐かしみながら、。(09) 広東省 (3) 順徳県①順徳へ (20数年前の順徳は今は昔) ②清暉園 (20数年前に逗留した由緒ある古園、「清暉園」) ③金頭 (20数年前の工場は？)

(5) 順徳県 ②清暉園 (20数年前に逗留した由緒ある古園、「清暉園」)

部屋にバッグを置くや否や、先ずは順徳県の大良鎮、否、今は順徳区大良街へと出かけた。ホテルの前の道路脇に懐かしい青塗りの土壁が見える。その高い土塀に沿って歩くと、清暉園の門が佇んでいた。すっかり、明るい色にお化粧直しをしているが、その姿は昔と全く変わっていない。門の前に立つと、懐かしい記憶が蘇って来た。



当時は、清暉園内の館がホテルとして使用されていた。そこに、ダオヨウさんを始め、数人の仕事仲間と一緒に逗留した。門をに入ってすぐ右手に女性の服務員の事務所があった。そこには唯一の国際電話があつて、日本への連絡によく使用させてもらったものだ。「もし、もし」が耳に珍しいらしく、服務員に「mousi,mousi」と笑みを浮かべながらもの真似された。1月から5月の初めまで、朝夕、オウさんの車で、清暉園のこの門の前から工場へ送迎してもらってから既に20数年が経ったのだ。

清暉園の門の左手に入場券売り場がある。ここにも高齢者優遇の掲示があつたが、ダオヨウさんが言う。

「一般の券を買いましょう！」

「そうですね、昔お世話になりましたからそうしましょう。」

と15元 (約220円) を支払った。

園内はすっかり新しく改築されていた。住民の憩いの場になっているらしく、小高い東屋が造られ、テーブルを囲う老人達が声高らかに喋りしていた。先の方には、噴水池や滝も新しく設けてある。

ダオヨウさんが、言う。

「この辺りには、盆栽が沢山並んでたですよねぇ！」

植物好きのダオヨウさんが、盆栽を土産に買って帰りたいと言ってたけど、検疫が必要で叶わなかったことを思い出す。

「確か、この先に小さい門があつたはずですよねぇ！」

「そうですね、あの丸い門をくぐると、その先に池がありましたよね！」と小走りに先へと進む。

「ありました、ありました！！」

「この門ですよ、昔とちっとも変わってませんね！」



当時、このレンガ造りのくぐり門から奥の方に池のある中庭があって、その池に沿って館の細い回廊が続いていた。奥の突き当たりの階段を上った2階に宿泊した部屋があった。

その丸い小門をくぐると左手に確かに池があり、池には錦鯉が放たれている。しかし、池に沿っての回廊の先に、当時の宿泊した部屋は見当たらない。

当時の部屋には、中国では必需のお湯の入った魔法瓶、外国へは繋がらない電話、ソファ、ベッド、時々お湯が出ないシャワーと湯船があった。トイレは幸い水洗式で助かった。机の引き出しの中には、大きなローソクが入れてあったが、それが停電時に貴重だと言うことをやがて経験した。

部屋は1人で使用するには広すぎるくらい大きかったが、この部屋は、家族連れで使用すると聞いた。当時、中国では国内専用の人民幣と海外で通用する兌換幣が併用されていて、1元（兌換幣）が約80円、1ドルが約150円の頃の話ではあるが、日本円に換算して1泊3千円くらいだったと記憶する。

昔の古い館は、立派な宮殿造りの建物に変わっていた。その宮殿の向こうには、近代式の”大楼”が幾つも並び聳えている。



池、樹木、古壁、石山、小橋、曲廊などが亭、台、楼、閣と一体となっている中国の庭園の特徴がいろいろの清暉園を一周して、門のところに戻って来た。そこに、小さな清暉園の説明石碑を見つけた。

『清暉園は、もともと、嶺南4大名園の1つで、嶺南文化の特徴がある。明王朝の末期、黄士俊と言う人の邸宅であったが、清王朝のとき、竜応時と言う人が買い取り、紀元1800年に、竜応時の息子の竜延槐が官職を退いた折に、母親のために園を造った。その後、竜延槐の息子の竜元任、孫の竜景燦、曾孫の竜諸慧が代々改修を重ねた。”清暉”とは、暖かいあまねく照らした陽光を意味する。』

などと記された後ろに、1996年に順徳区政府が、この名園、清暉園を再現させたと書き添えてあった。

これを見て、オウさんが話してくれた順徳県の歴史を思い起こした。

『順徳県は、明王朝の時代、紀元1449年に南海県冲鶴堡番村で発生した黄蕭養による農民反乱を明王朝が鎮圧し、この地域への統治強化を図るために紀元1452年に”順徳県”が設置されたのを発祥として、”順徳”とは、”順天明徳（天に順し、徳を明かす。）”の意である。』

我々が逗留した当時、清暉園の館や庭園は古びていたが、由緒有る館に過ごした訳で、貴重な経験だったのだと改めて感慨を深くした。

心を引かれながらも清暉園の門を出る。この清暉園前の大通りの斜め向こうに「中国旅行社」があったはずだが、見

当たらない。そこには、高層ビルの近代的なホテルやマンションが並んでいた。

香港で数回話し合った後、ここ、順徳県の「中国旅行社」と言うところで交渉が行われた。その会合の後の宴で振舞われた順徳の料理は美味しかった。特に、最後のデザートに出された甘い牛乳に驚きながら堪能した。

「中国旅行社」には宿泊設備もあり、その部屋のベッドには、あのクレオパトラが使用していたような白い束が天井から吊り下げられていた。それが蚊帳であることを理解するまでに少し時間を要したが、今となると、本当に懐かしい思い出である。

(5) 順徳県 ③金頭(20数年前の工場は?)

清暉園の門の前で、しばし思い出に浸っていると、ダオヨウさんが言う。

「金頭へ行ってみましょう！」

工場の住所は、「金頭」と記憶している。タクシーを拾い、「金頭」と行き先を告げる。清暉園の門前から大通りをしばらく走ると、右方向へ緩やかな下り坂となる。その道なりの方向感覚は、今でもはっきりと残っていたが、走る道路は広くなり、舗装され、その左右の風景が全く変わっていた。

当時、車と言えば、公共のバスか、タクシーくらいであったが、今は、バスの他、トラックやピカピカの自家用車が広い道路を埋め尽くしており、その脇には“大樓”が並んでいる。

初めて、工場予定地に案内されたときには、水牛が水中に蹲る田圃の中につくられた農道を通って行った。着いた所には、バナナ畑が広がっていて、隣の農家のアヒルが群がっていた。

そのバナナ畑を指差しながら、オウさんから“電気はこれから引く、水は井戸を掘る、そして、工場建屋を建てる”との説明があった。

有機硝子製造設備は重量が大きい。製造設備が地盤沈下で沈み込んで困るので、先ず地質調査を依頼する必要がある。交渉では、設備の費用に加えて、生産技術ノウハウ(運転技術ノウハウや設備保全ノウハウ)の費用が必要なことを理解してもらうのに苦労した。

テレビなら買って来て、スイッチを入れれば画像を見れるが、有機硝子製造設備は置いただけでは有機硝子は生産出来ない。オウさんへ有機硝子製造の基本的なところから説明を丁寧に行った。特に、目に見えない“ノウハウやソフト”の価値を理解させるのに長時間を要した。とにかく、その説得は成功して、設備の費用に、その設置の指導の費用、先方の日本での生産技術ノウハウ習得の費用、当方の中国でのその指導の費用などを加えた、トータルの有機硝子製造設備の見積を納得してもらった。

そして、設備を日本で造る間に、順徳の従業員数名を日本で生産技術の教育を行うこととなったが、その従業員に順徳政府の役人が数人着いて来たのには驚かされた。その政府役人には、東京・富士山・京都・奈良の観光の後、帰国してもらった。

日本での従業員数名の生産技術の教育が終了し、設備の製造が完成した後、ここ、順徳に設備を設置するのに1ヶ月余り、そして、その後、日本で教育した従業員を中心としながら順徳の従業員への技術指導が約3ヶ月続いた。

従業員の年配者への教育には予想もしない苦労を要した。年配者は“広東語”しか話せなく、通訳は、北方出身で標準語の“普通語”しか判らない。若い従業員は学校教育で“普通語”が判ることを知って考えた。先ず、日本語を通訳に“普通語”に訳してもらい、その“普通語”を若い従業員に年寄りの従業員へ“広東語”に通訳役してもらった。

でも、女性の従業員は良く働いた。あるとき、男性の従業員に言った。

「这样的嫌弃的话,日本的男人绝不让女人作啊! zhèyàng de xiánqī dehuà, rìběn de nánrén juébù ràng nǚrén zuò a! (こんな汚れ仕事は、日本の男性は、女性にやらせないよ!)」

そうしたら、その男性の従業員は平気で言い放った。

「没关系,比起来那个女人服务员和男人的薪水一样。méiguānxi, bǐ qǐlái nàge nǚrén fúwùyuán hé nánrén de xīnshuǐ yīyàng. (いや、あの女性従業員も男性と同じ給料をもらっているから、。)」

工場には食堂があったが、従業員の皆さんは金属製のどんぶり風の容器にご飯を入れて、その上に野菜と肉或は魚と

の炒めものを乗せて、或る者は、地べたに座って、或る者は立ったまま食べていた。

我々は、別室での食事であったが、ご飯が硬いのに閉口した。中国米は、日本米に比べてパサパサとしていて、炒飯には向いているが、炊飯には向いていない。そこで、ご飯の炊き方、水を多く入れるように服務員に指導したものだ。

ダオヨウさんを初め仕事仲間による手取り足取りでの順徳の服務員への製造技術の指導は苦労は多かったが、順徳の服務員も頑張りもあって、先ず、昼夜連続運転実施まで漕ぎ着けることが出来た。

そして、政府役人を迎えての試運転を終えて、4月末には目出度く竣工式を迎えることが出来た。井戸を掘って、その水を貯め置くタンクを乗せた高いタワーの上からぶら下げられた幾重にも連なる花火が打ち鳴らされる中、祝賀宴会は多くの政府役人を迎えて盛大に行われた。

竣工式を終えて、帰国となったが、ここ、順徳の服務員の皆さんとの桂林観光に同行させてもらった。そして、我々は、広州で皆さんと別れ、香港経由で帰国した。

タクシーの運転手は、言う。

「这里是金头。zhèlǐ shì jīntóu. (ここが、金頭だよ!)」

降りてみたが、辺りは見覚えは全くない。通りの店の小母さんに先ず、確認する。

「这里是金头吗? zhèlǐ shì jīntóu ma ? (ここは、金頭ですか?)」

「对。duì. (そうだよ!)」

「你知道“有机玻璃工厂”吗? nǐ zhīdào “yǒujī bōli gōngchǎng ”ma ? (アクリル工場は知りませんか?)」

「不知道, 这里有很多的工厂。你们最好去那边问一问。bù zhīdào, zhèlǐ yǒu hěnduō de gōngchǎng. nǐmen zuìhǎo qù nàbian wèn yī wèn. (知らない、ここには工場がいっぱいあるからそこで尋ねてみたら良いよ。)」

指された方向へと歩くことにする。当時の田圃は工場郡に変わっていた。立ち並ぶ工場の門の前にいる”工作人”らしい服務員に問ったが、返事は、同じ、「不知道。bù zhīdào。」である。

ダオヨウさんが言う。

「もう少し、偉そうな”服務員”を探そう！」

”事務員”らしい”服務員”を捕まえて、

「你知道“有机玻璃工厂”吗? nǐ zhīdào “yǒujī bōli gōngchǎng ”ma ? (有機硝子工場は知りませんか?)」に加えて、

「我们从日本来的。二十多年前在金头建设“有机玻璃工厂”。wǒmen cóng rì běnlái de. èrshí duō niánqián zài jīn tóu jiànshè “ yǒujī bōli gōngchǎng ”. (我々は、日本から来ました。20数年前に金頭で有機硝子工場を造りました。)」と添えた。その”20多数年前”の言葉に効果があったようだ。

「不知道, 可是村长在附近, 我想带你们去那里。bù zhīdào, kěshì cūnzhǎng zài fùjìn, wǒ xiǎng dài nǐmen qù nàlǐ. (私は知らないが、近くに村長さんがいるからそこへ連れて行ってあげるよ。)」と近くの工場の事務所へと案内された。

村長さんを紹介されたので、その村長さんに金頭を訪れた事情を説明するために、工場訪問が叶ったときのために予め用意しておいた文書やダオヨウさんが携帯して来たオウさんから感謝の手紙とともに当時の工場での写真を見せることにした。

『我们叫dalong和daoyou. 我们二十多年前, 从日本来, 在“有机玻璃工厂”指导有机玻璃板制造技术。那时这个“有机玻璃工厂”有叫Ou的先生。我们有他给daoyou先生寄送的信。还有那时候在“有机玻璃工厂”拍的照片。可能的话, 我们很想听“有机玻璃工厂”的最近的情况。wǒmen jiào dalong hé daoyou. wǒmen èrshí duō niánqián, cóng rì běnlái, zài “yǒujī bōli gōngchǎng ” zhīdǎo yǒujī bōlibǎn zhìzào jìshù. nàshí zhège “yǒujī bōli gōngchǎng ” yǒu jiào Ou de xiānsheng. wǒmen yǒu tā gěi daoyou xiānsheng jì sòng de xìn. háiyǒu nàshíhòu zài “ yǒujī bōli gōngchǎng ” pāi de zhàopiàn . kěnéng dehuà, wǒmen hěn xiǎng tīng “yǒujī bōli gōngchǎng ” de zuìjìn de qíngkuàng. (我々は、20数前に日本から来て、この有機ガラス工場でアクリル樹脂板の製造技術を指導をした者

で、ダーロンとダオヨウと言います。当時、有機ガラス工場には、オウと言う方が居られました。ここに、オウさんからダオヨウさんへの手紙と当時の我々の写真があります。よろしかったら工場の近況を聞きたいと思います。）」

これをしばらく見て、村長さんにはっこりしながら言った。

「我有朋友认识Ou先生,给他打电话一下。wǒ yǒu péngyou rènshi Ou xiānsheng, gěi tā dǎdiànhuà yīxià. (オウさんの知人を知っているから電話してみる。）」

しばらくの電話の後、村長さんが事情を教えてくれた。

『オウさんは20年くらい前に亡くなった。そして、その工場は、10数年前に深圳へ引っ越した。』

”有機玻璃工廠”が竣工して1年後の式典に、ここ、順徳に呼ばれたが、オウさんとはそれが最後となった。1989年、「天安門事件」が勃発して、中国は混乱の時代に突入したのだ。音信不通となってしまったオウさんは、失意の中で亡くなったと香港の華僑を通じての伝えがずっと後になって届いた。

1978年に復活を果たした「鄧小平」は、当初、民主化路線を擁護していたが、ポーランドでの民主化運動に危機を覚え、1987年には、政治体制改革推進派だった腹心の「胡耀邦」を失脚させて独裁政治に走った。その「胡耀邦」の死を悼んで、1989年4月中旬、学生たちが追悼デモを始めたが、一般人民、政府の役人、マスコミ、軍人などをも巻き込んで、天安門広場を埋め尽くした民主化要求のデモは、全国的に発展した。

しかし、1989年6月3日の夜中から4日未明にかけて、中国共産党は、天安門広場や市街地で民主化要求をする丸腰の学生や一般人民に対して、人民解放軍の装甲車(戦車)等の完全武装部隊に無差別発砲を命じた。

これが、「血の日曜日事件」とも、また、その発生日の6月4日から、「六・四」とも呼ばれる「天安門事件」である。この民主化運動に関わった者は、中国全土に渡って、ことごとく粛清されたと言う。

村長さん達に、感謝と別れの言葉を告げて、「金頭」の入り口へゆっくりと歩いた。

ダオヨウさんの言葉が後ろから聞こえた。

「残念でした!!」「そうですね、10年遅かったですね。」

定年後、直ぐに来ていれば、当時の順徳の服務員の皆さんと会えたかも知れないと思うと、本当に”残念”である。



すでに陽は落ちて、暮れなずむ「金頭」の路傍には、西瓜が売られていた。荷車が自動車に変わっていたが、山積されたスイカの姿は変わっていない。

その西瓜の切り売りを買って、ダオヨウさんと昔を偲びながら食べた。スイカの味は、昔とちっとも変わってない。そのほの甘さに懐かしい想いが込み上げて来た。

(5) 順徳県 ④園林賓館(20数年前のレストランは?)

清暉園までタクシーで戻り、”晩飯”を食べることにした。清暉園の門から塀沿の大通り、清暉路をほんの少し歩いたところに「園林賓館」があるはずだ。当時、その「園林賓館」のレストランで毎日食事を取った。

ここ、順徳県には小さな映画館はあったが、観ても聞き取れない。巷ではアンテナを香港に向けて、その広東語の娯楽番組が見られていたが、ホテルのテレビは国営放送のみで娯楽番組は皆無であった。

工場から帰って来てからの唯一の楽しみは、円卓を囲んでの夕食であった。中国語は、“听不懂”（聞いて解らない）で、メニューには漢字が羅列されているが、“看不懂”（見て解からない）なので、料理を注文するのに苦労した。各人がそれぞれ異なった料理を頼んで食べ合い、各人が口に合うものを選ぶことにした。そうする内に、1週間くらい経ったら、各人好みの料理が自ずと判って来た。アルコール類は、ビールは青島ビール、お酒は紹興酒・老酒が美味かった。それに、あの楊貴妃も愛飲したと言う白ワインに桂花（金木犀）を漬け込み熟成させた果実酒、“桂花陳酒”が口当たりが良いと皆に受けた。

このような経験で、順徳のどの料理が美味しいかは、すでに知っている。広東料理には大きく4種類ある。広州料理、潮州料理、東江（客家）料理、そして、順徳料理である。順徳は珠江デルタ地帯にあり、川や池が多く、温暖な地にあるため淡水魚や野菜などの食材が豊富である。料理の香り付けに生姜、葱などを多用するのは、広東料理全般にみられるが、順徳では陳皮、橄欖、紫蘇などがよく使われる。中華料理の一般的な調理法の外、土鍋、鉢、盆などを用いて蒸し焼きにする料理や“魚生”と呼ばれる刺身の1種、そして、うなぎやスッポン料理もあった。

うなぎと言うと、オウさんの奢りでうなぎ料理を頂いたことがあったが、ぶつ切りで出て来てびっくりした。オウさん達が日本に来たときに、うなぎの蒲焼を食べてもらったが、開いたうなぎは食べ易くて“Good”だと、親指を立てて感心された。

「園林賓館」があるはずの場所は、一方通行の上下2本の大きな通りがそれぞれ東西に交差する広い十字路に変わっていた。再開発された“順徳県”の姿に寂しい想いもするが、“順徳県”が大発展したことの方を褒めることにしよう。

「園林賓館」の付近には、“貿易中心”があったはずだ。当時、この“貿易センター”は、香港からの輸入品が並んだ順徳県で唯一商品らしい品物が売られる店であった。

その“貿易中心”だった辺りには、高層の新しい“大樓”が並び、その一角に“新世界中心市場”があった。中に入ると、ショッピングセンターで、豊富な品が毀れんばかりに並んでいる。ダオヨウさんが記念にと革の財布をゲットした。80元（約1200円）とリーズナブルな値段である。

大通りに出て、スーパーマーケットを覗いてみた。入り口に色とりどりの沢山の種類の果物が小箱に綺麗に盛られて売られている。

当時、果物と言えば、種類が極めて少なかったし、外見が綺麗ではなかった。その代表が大小不揃いの表面が薄汚れたオレンジだった。店と言えば、清暉園の裏側の細い長い道沿いに商店街があり、食料品店の他にも、装飾品店、衣類店、漢方薬の店、判子屋、理髪店など並んでいた。ここを“順徳銀座”と呼び、この商店街の端にあった樹木が春にピンクの花を咲かせたので、“順徳ざくら”と呼んで楽しんだ。

スーパーマーケットの店内を一周して観察して見ると、商品の種類と量は日本と大差なく豊富である。カップラーメンもずらりと各種並んでいる。日本の価格に比べて、果物、野菜、お米などは大凡5分の1位と極めて安い。狭い田圃で作る日本の稲作がいかにか非効率が解かる。でも、お菓子類は、日本とその価格が大差ない。もしかすると、香港辺りからの輸入品が多い所為なのであろう。



「鄧小平」は、「天安門事件」を武力鎮圧した直後、上海での民主化要求運動をうまく処理した上海市党委員会書記の「江沢民」を中国共産党中央委員会総書記に抜擢し、1993年には中華人民共和国主席に就任させた。

そして、「天安門事件」以降、停滞していた経済を打開するため、1992年の1月から2月にかけて、湖北省の武漢、広東省の深圳、珠海、そして、上海を視察して、「改革開放政策」を講話した。これが、所謂、「南巡講話」である。

ここ、広東省は、この「改革開放政策」によって、最も発展した地域の1つである。北京、上海に次ぐ中国第3の大都市である省都の広州市（人口約1270万人）を初め、経済特区の香港と接する深土川市（約1300万）、澳門（マカオ）の接する珠海市（約150万）、東莞市（約700万）、中山市（約250万）、清遠市（約390万）、惠州市（約380万）、仏山市（約590万）などの都市がある。

その仏山市に、順徳区がある。20数年前に訪れた時は、まだ順徳“県”であったが、1992年に“市”となり、2002年に仏山市の市轄区、順徳区として改編されて現在に至っている。現在の仏山市順徳区は、電子、食品工業も盛んで、広東省経済発展の虎と呼ばれ、人口約160万（定住者約110万、外来者約70万、海外者約40万を有する。160万と言うと、横浜（約370万）の4割、横須賀（約40万）の4倍の人口である。

1987年の中国のGDPは、1,608.15×10億元に過ぎなかったが、2011年は、15,447.47×10億元と、この24年間で約10倍のGDPに増大したが、それをここ、順徳でも反映しているのが解かる。20数年前の田圃の農村が、横浜の4割ほどの大都市に変貌したのである。当時の街並みの面影がほとんどないのも当然である。

そう言えば、順徳の服務員は、当時、順徳は中国一番の高給取りだと、その月収200元（当時の兌換幣レイトの1元80円として1万6千円）を自慢していたが、広州、そして、香港や澳門（マカオ）に近く、珠江デルタ地帯の中心と言う、地理的な良条件が揃っていたのである。

順徳の街の大変貌に驚くが、「十年一昔」と言うから、我々が逗留したのは、二つもの「大昔」だったのだ。

清暉路に面した“新世界酒店”のレストランで、“晚饭wǎnfàn”を取ることにした。今夜は、当時の仕事仲間、順徳の服務員、そして、園林賓館の服務員もいないダオヨウさんと2人きりの“晚饭wǎnfàn”でちょっと寂しい。しかし、当時よく食べた豚肉の甘煮の味は、昔ながらの美味しさを維持していた。

明日は、広州へ戻る。今夜は、順徳でゆっくりと夢でも見よう！

（3）順徳県 ⑤順徳県の夢（20数年前の仕事仲間は？）

ベッドに入るが、すぐには眠りに就けない。薄っすらと目を開けると、ベッドの天井辺りから何やら白い布見たいなものが垂れ下がっている。20数年前、初めての順徳の宿で見た、あの白い布だ。その白い布に全身が包まれて宙に浮き、すーっと水平移動したところは、先ほどダオヨウさんと探しに来た「園林賓館」の前だった。

そこには、昔のままの「園林賓館」が佇んでいた。不思議に思いながらも、入口のドアを開けて見ると、2人の小姐がにこやかに迎えてくれていた。

「欢迎欢迎。我们已经把早饭准备好了。huānyíng huānyíng. wǒmen jǐ jīng bǎ zǎofàn zhǔnbèi hǎo le.（ようこそ、いらっしやい。“早飯”を用意してありますよ！）」

そのお2人には何だか見覚えがある。

「谢谢！xièxiè！（ありがとう！）」

と、お礼を言って、昔懐かしい点心の朝食を頂く。

20数年前も朝食は点心であった。服務員が小皿に盛られた色んな点心を載せた台車を押して各テーブルを廻った。食べたい点心の小皿を取ると、服務員が用紙のメニュー蘭の中のその点心にチェックを入れてくれた。勘定のときに、その用紙を見せて料金を支払った。お腹いっぱい食べても、大凡300円くらいのものであった。

不思議なことにメニューに餃子がなかったが、餃子が満州人など北方人の食物で南方人は日頃口にしないと聞かされた。烏龍茶は無料サービスで、テーブルを人指し指と中指でトントンと叩くと、すぐに服務員がやって来て、湯飲み茶

碗になみなみと入れてくれた。

言葉が不自由な我々にとっては、この習慣に助かったが、オウさんから二本の指でトントンとテーブルを叩く仕草が、人がお辞儀をしている様子に似ているからだとの説明を受けて納得した。

ここ、「園林賓館」の服務員の皆さんには、本当にお世話になった。広州から関係者を迎えて、夕食会をやっていたときに、適切なデザートがないので外の店まで果物を買って行ってくれたのを覚えている。中国はサービスが悪いことで有名であったが、園林賓館の服務員は心優しくかった。

「这个点心和二十多年前的一样很好吃啊！zhège diǎnxīn hé èrshí duō niánqián de yīyàng hěn hǎochī a！（この点心は、20数年前のと変わりなく、とても美味しいです。）」

と素直な言葉が出て来る。

「那太好了！我们还有准备吃午饭了。nà tài hǎo a！wǒmen hái yǒu zhǔnbèi chī wǔfàn le.（それは、良かったです、昼飯も用意してあります。）」

どうしたものか、今朝食を頂いたばかりなのに満腹感がない。

料金を支払おうとすると、

「不需要,我们已经把车准备好了,请你们乘车。bù xūyào, wǒmen jǐ jīng bǎ chē zhǔnbèi hǎo le, qǐng nǐmen chéngchē.（必要ありませんよ、車を用意してありますからどうぞ乗って下さい。）」

と、料金を受け取らないばかりか、店の前に車が準備されていた。

案内されるままにその車に乗り込むと、

「你们好！我们是他们的女儿啊！nǐmen hǎo! wǒmen shì tāmen de nǚér a！（こんにちは。我々は娘なんですよ！）」

と自己紹介された。

その若い姿を見て思い出した。先のお二人は、当時お世話になった園林賓館の服務員だったのだ。

「你们长得和母亲俩一模一样。nǐmen cháng de hé mǔqīn liǎ yī mó yīyàng.（お2人ともお母さんそっくりですね！）」

「順德漁村」と言うレストランに”午飯”の準備が整っているのでこれから車で案内すると言う。

園林賓館から10分ほど行ったところに、突如大きい豪華な高層建築物が現れた。そのガラス張りの近代的な建物は、順德区政府の庁舎だと説明される。

「顺德县是“有金的”啊！shùndé xiàn shì “yǒu jīn de” a！（順德県は、“お金持ち”ですね！）」

と素直に感想を言うと、自信に満ちた回答がすぐに帰って来た。

「对, 顺德区现在“有金的”了。duì, shùndé qū xiànzài “yǒu jīn de” le.（そうです、今はお金持ちとなりましたよ！）」



やがて、「順德漁村」と言うレストランへ着く。その名前、「順德漁村」が元々この辺りが漁業を生業としていたことを教えているが、新しいレストランで魚が泳ぐ飾り水槽が雰囲気盛り立てていた。

色んな料理が出された。特に”火烤肉”が美味しかったが、烤とは、火で炙って焼く料理方法である。中国では、鳥でも豚でも丸ごと焼いて、食べる時に小さく切り身にする方法がよく取られるが、日本の焼き鳥のように小さく切った「切り身」を串に刺して炭火に炙って焼いてある。日本料理の天麩羅か、フライに似ている魚料理も美味しい。甘辛いソースを付けて頂いたが、柔らかい口触りが何とも言えない。

娘さん達の話によると、お母さん達は、2年前に日本を訪れたと言う。広州から関西空港へ行き、大阪城、京都の清水寺、富士山、箱根、横浜、浅草、東京ディズニーランドを観光して、成田から広州へ帰る1週間の日本旅行だったとのことである。

娘さん達が言う。

「櫻花开的时候,我们想也去日本。yīnghuā kāifàng de shíhòu, wǒmen xiǎng yě qù rìběn. (さくらが咲くときに日本へ行ってみたいです。)」 「那太好了! 樱花在日本从三月底到四月初旬盛开了。yīnghuā zài rìběn cóng sān yuè dǐ dào sì yuè chū xiǔ shèng kāi le. (それは良いですね! 日本では、3月末から4月初めにさくらは満開となりますよ。)」

ビールもいっぱい頂いたが、どういう訳か、少しも酔わないから不思議である。食べ終わるや否や、これから広州の近くにある「宝墨園」と言う庭園へ案内すると言う。

広州への途中で、説明を受けた。

『広州市の南沙には、日本のトヨタ自動車と中国の広州汽車集团股份有限公司との生産・販売合弁会社である”广汽トヨタ自動車有限公司”があります。2006年に1号車が生産されましたが、2011年には、100万台を突破して、記念式典が行なわれました。現在、中国の車保有台数は、日本より多く」なつたのですよ!』

そう言えば、世界の自動車保有台数(2011年)は約10億のうち、自動車大国のアメリカが約2.9億台とNO.1であるが、中国は約1億台と、日本の約0.8億台を越えて、NO.2となっている。

やがて「宝墨園」に到着した。大きな門の中央に掲げられた扁額に「寶墨園」とある。この門を初め、全ての建物が真新しい。先ず、目に付いたのは鯉の池、さすが中国でそのスケールが大きい。大きな鯉がその広い池を狭しと泳いでいる。餌をやりると、一斉に鯉が大群をなしてやって来て、大きな口を開けて並ぶ。皆んな丸々と太っていて、所謂肥満鯉である。

古代様式の建物の周りを池が囲む。亀の池があり、その亀の群れの中に、長寿を表す亀鶴蛇の像がある。そして蓮の池には、中央に観音さまの白い像があった。



古代の装飾品を陳列する部屋に動物の石像の部屋が続く。なんとも南国らしく、ゆったりとした水牛達のがっそりと立ち並んでいた。



土産屋にもステンドグラスが贅沢に施されていたが、店の脇にきのこと類がどっさり売られていた。アイスクリームが売られていたが、それには日本の北海方の小豆を使ったと表示がある。小豆は北国の産物なので日本から輸入されているのであろうか。そのアイスクリームをほお張りながら船頭さん付きの舟に乗って、池を遊覧して楽しんだ。

中庭に宝墨園の造園の経緯を記した大きな掲示板があって、そこには、明・清時代の建物と庭園を1999年に再現したとある。道理で、建物の様式は旧いが、建物自体は、真新しいはずだと納得する。



先に進むと、回廊があり、天井そして欄間には、装飾が綺麗に施されていた。紅、青、緑、黄色と色鮮やかなところは中国の特徴だ。更に進んだところに、屋上へと登る階段があり、そこを上がって行くと、屋根の嶺にこれまた色鮮やかな陶器製の像が毀れんばかりに並んでいた。

この「宝墨園」は、所謂、「嶺南」の古代建築、造園芸術で、珠江デルタ水郷を表した庭園で、『南粵の真珠』と称される名園で、その名は、この近くの肇慶市で品質の優れた硯石が採ることによっているとのことである。そう言えば、その証に巨大な1トンもある硯が置いてあった。

雄大で綺麗な庭園にすっかり満足して、宝墨園の門を出ると、これから順徳に戻って、「晩飯」とのことである。

あっという間に順徳の大きな通りの四つ角の一角のレストランに着いた。大きな円卓が幾つも並んでいて、多くのお客さんが賑やかに食事を愉しんでいた。二階への階段を登って個室に案内された。広い窓から順徳の街灯りが見える部屋の中央の丸い大きなテーブルに着くと、何とそこには、オウさん達がいた。

南方人としては珍しい背の高いオウさんの他に、機械担当の身体のがっちりとした黒メガネのチンさん、目が鋭い電気担当のリユウさんがにこやかに我々を迎えてくれている。しかし、不思議なことに皆さんは、ちっとも年を取って

ない。

「欢迎欢迎！！huānyíng huānyíng！！（ようこそ、いらっしやい！）」

「好久不见了！我没想到和你们见面。hǎojiǔbùjiàn le！wǒ méixiǎngdào hé nǐmen jiànmiàn.（お久振りです、お会い出来るなんて、思ってもみませんでした。）」

「先干杯吧！xiān gānbēi ba！（まずは、乾杯しましょう！）」

と晚餐会は始まった。

大皿に盛られた海老料理が出て来た。美味しそうな手の長い大きな海老である。順徳は海に近い、きっと近海で獲れた海老なのだろう。赤く湯がかれた海老を素手に取って、口に入れると、ジューシーで濃厚な味わいがする。思わず、中国語が口から出て来た。

「很好吃！hěn hǎochī！（とっても美味しいです！）」

テーブルの中央に火鍋料理が準備されていた。鍋に入った野菜や肉や魚貝類を頂く。ここ、順徳は海に近いので魚介類が美味しい。鳩も出てきた。鳩と言えば、20数年前も鳩を食べたことがある。鶏肉より味は濃いと覚えている。ゼラチン質の柔らかい感触がなんとも美味しい。

鍋の中に白飯が入れられた。お粥となるようだ。当時、順徳でのご飯は、白飯はパサパサと水分が少なく、口にあまり合わなかったが、水分が多い「粥」は美味しかった。その「粥」を見て、工場での思い出話を披露する。

『工場で昼夜運転を初めて実施したとき、オウさんが皆に夜食として、「粥」を持って来た。その「粥」は、なんと洗面器みたいな大きな金属製の器に入れられていて、こんな大量の「粥」は食べら切れないと思ったが、食べてみるととっても美味しくて、全てお腹に入って行った。』

「粥」を食べて満腹となったが、デザートも出された。あの「甘い牛乳」だ。順徳は乳牛の飼育が盛んで、これは順徳名物であるとのことである。このホットな甘い牛乳には、初めて順徳を訪れたときの会議で疲れた頭を癒してくれた思い出がある。

皆さんは、我々に現在の順徳の発展振りを誇らしく説明する。

『順徳は、昔は養殖、酪農、養蚕、花卉栽培、甘蔗栽培などの農業が中心だったが、今では、多くの海外の企業が進出して来て、家電製品のエアコン（科龍kelon）、扇風機（美的medea）、冷蔵庫（容声ronshen）、電子レンジ（格蘭仕galanz）、湯沸器（萬家樂macro）やIC部品の電気工業、そして、アパレル製品などの工業が中心となった。日本からも東芝、パナソニックなどのメーカーが生産している。

年間の輸出入総額は61億ドル、そのうち輸出が38億ドルである。中国の国家統計局の発表によると、中国で社会経済総合発展指数を4年連続でトップの位置を維持しており、給与水準、自動車普及率なども中国一です。

観光面では、広東省の四大庭園である「清暉園」を修復した。また、陳村に花園芸の世界、均安に碧桂園ゴルフレジャーランドなどを開発した。近年では家具博覧会、家電博覧会、花園芸博覧会を開催し、また、アジア最大のスノーピーランドが建設中であり、そして順徳が故郷だといわれるブルースリーの記念館の開館など、レジャー施設も充実させた。また、ウォルマートに続き、大型ショッピングセンター、日本のイオン（ジャスコ）がアジア最大の規模の店を2007年に出店しました。』

その順徳県の大発展の話に聞き入ってしまったか、いつの間にかオウさんが見当たらなくなったのに気が付かなかった。

「Ou先生去哪里了？Ou xiānsheng qù nǎli le？（オウさんは、どこへ行って仕舞ったのかな？）」「Ou先生二十年前左右去世了。Ou xiānsheng èrshí niánqián zuǒyòu qùshì le.（オウさんは、20年ほど前に亡くなりました。）」

「ええ！？」と驚きながらも、やはりそうかと納得した。そして、皆さんに「晚餐」の宴のお礼を言おうと思った瞬間に、目の前に部屋の天井がぼんやりと見えて来た。

その天井に向けて足を動かす体操をしながら、ダオヨウさんが言う。「寝言を言ってたよ、どうも中国語みたいだっ

たけど、。！？」

そうか、やっぱり夢だったのだ。その「順徳県の夢」から醒めて、少し寂しい想いが満ちて来た。